

---

# 桃崎さんに一目惚れ

やす

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

桃崎さんに一目惚れ

### 【コード】

N9775P

### 【作者名】

やす

### 【あらすじ】

秋彦はバイト先の桃崎さんに一目惚れ。初めての恋。彼女のささいな言動に、テンションは上がり下がり。でも現実は思っていたのと違って……（予定）

## 一話

「そりやお前っ、恋だろ？」

深夜のファーストフード店。駅前ビルの上階。

零時をまわった今、寂しげに光る看板以外、明かりがついているのはこのビルの1、2、3階ぐらいだったりする。

ガラス張りにされた店内は外から見ればぼつと光り、まばらになった利用客がちらほら拝見できた。

他のほとんどの客はお一人様である。遅い夕飯をパッとすませようとするサラリーマンか、コーヒー1つにうつむいて寝ている年配の男性。あるいは、終電を逃して、始発までをやり過ごすようにしている人。

外の静けさもしみこんでくるような店内で、1組の会話が響いていた。

「　　っだから！　恋愛！　新しい恋！　彼女！」

大きな身振り手振りに、口まで尖らせたのにもかかわらず、相手の反応はいまいちで、眉ひとつ動かさない。

というより驚いて言葉が見つからないといった状況らしい。

この日は高校の仲間たちと、卒業後の門出を祝う集まり………という名の飲み会だった。

正確には昨日であるが。

珍しく「帰り少しよってかないか？」などと秋彦のほうから誘って

くるからついてきてみれば。

「なんだよ。」

秋彦は整えた眉をよせ、さっきまでの元気はどこへやら、肩を落とした。

隆文のほうからしてみれば、何か重要な話……とまでは行かなくとも、6年間とにもすぎた学生生活についての弔いというかな、そんなものを期待していた。

「お前雰囲気変わったな。」

隆文がやつと口を開いた。

「いや、ん。まあな。」

「なんだよ、そのあいまいな返事は。」

高校時代の秋彦は、髪は基本伸ばしっぱなしだった。服にももちろん無頓着だった。それなりに、まあクラスのやつに合わせている程度。無論、髪など染めてはいない。

それがほんの三週間ほど、隆文が3月入試に最後の望みをかけている間、あるうことかコイツは。

ゆるい癖があった髪はまっすぐに伸びているし、毛先のボリュームが減ってる。

色もすこし控えめだけど濃い茶に染めてる。

服は黒っぽく統一。

隆文には見慣れないものばかりだった。  
光沢のある上着と靴は特に。

「お前、チャラ男？ ……目指してんの？」

隆文の視線から逃げるように、秋彦は大きさにガラスの外を見下ろした。

別に何もなかった。

というより、誰もいない、静かな通りだけである。

隆文は長いため息を1つついた。

外見が変わって、秋彦が少し遠くなったように思ったが気のせい。話せばいつもと変わらない秋彦だった。

「別にさ、大学入ったら、とりあえずは染めるだろ？ そんなら今やっっちゃおうと思ってさ。」

「はいはい分かった、恋ね。」

顔立ちはもともといいほうだ。外見にかまわないときだって秋彦は隆文の目から見てモテていた。

にもかかわらず、今までそっちの話には完全に興味を示さなかった。もしかして、“そっち”系なんじゃないかと心配されたことだってある。

「いい子でもいた？」

隆文の言った言葉に、自分で振った話題にもかかわらずビクつく。

そしてまた大きなため息をつかれる。

「まあ、いいんじゃないの？ 恋愛だろ？」

## 二話

時は二週間ほど前にさかのぼる。

そこには隆文もよく見慣れている秋彦がいた。パーカーにジーンズにスニーカー。

受験から解放されての春の陽気は気持ち良かった。

愛車のペダルを踏みしめて風を切る。

青い空に見慣れた街並み。自然と口許が緩んだ。

家を出て40分ほどで、秋彦は目的のコンビニに到着した。

周りは特に目立った建物のない住宅地。

入り口には駐車スペースが広めにとられているが、見たところ客は2組ほどである。

隣の家の木が大きく垂れて店の敷地に日陰を作っていた。秋彦はそこに自転車を止めた。

外から見えるレジカウンターの中には、制服を来た中年の色白の男性が忙しなく動いている。

その様子を横目でちらと伺い、すぐに視線を外した。

なるべく平静を装おうと、視線のとどまる位置を探すと、ガラスに写る自分が見えた。

豊かな黒髪が肩に触れ、前髪は先ほど受けた風により、後ろにそれていた。

そこに適当に指を入れ、撫で付けてみる。

そこで思ったほどには改善されなかったので、秋彦は諦め入り口へと向かった。

「あ、こんにちは。面接？だね。」

見掛けとは裏腹、優しい声色の店員に裏の事務室まで通された。

中にはパソコン画面の前に座る、良くスーパーで買い物してそうなバイタリティー溢れるおばさんがいた。

「あら助かるわ。今人手が足りないの。力仕事も大丈夫そうね。」

おばさんは、大きな目を更に大きく開き、力のこもった声で話す。

「外山…秋彦くんよね？」

「はい。」

「私、店長の鈴木則子といます。」

迫りに押され、秋彦の目までもいつもより少し開きぎみになった瞬間が、恋に落ちる五秒前。

「ひゃあっ！」

店の方から、若い女の子の声がした。

秋彦と同年代だと思われる。

すぐそばの扉から、何か物がぶつかり倒れる音がした。

「すみませんっ！」

とまたさっきの可愛い声がした。  
切羽詰まっているような、しかし、はっきりしつかり聞き取れる。  
感じのいい声だ。

「大丈夫？ あ……………いいよ。やっとくから。」

秋彦はすでにつられて、後ろの扉に目を向けていた。

後ろ頭で店長の静かで長い溜め息がした。

パンツ、と大きな音をたてて扉が開くと、女の子が飛び込んできた。

緩やかに流れる長い髪を一つにまとめて、上気し頬が少し赤く染まっていた。

ごくごく自然とどこにでもいるような、可愛い今時の女の子だった。

特徴と言えば、色白。上がった口角。

モコモコした丈の短い上着を羽織っている。

「お先に失礼し…あっ！ すみませんっ！」

「はい。お疲れ様。また明日よろしくお願いね。」

「はい。」

彼女が笑った。

黒目がちな瞳が細くなって。

彼女は慌てたように、また同じ扉から出ていった。

長い髪が優しく揺れる残像だけが、秋彦の目に残った。

「それで……………なんだったっけね。」

店長は短く笑い、そのまま咳をして真面目な顔に戻った。

「あ、そうだ。外山くん。髪ね、お店に出るときは縛るか、出来れば散髪してきて頂戴。」

### 三話

「それで？」

隆文は腕を組み、気持ち上がりぎみな顎を向け秋彦の様子を眺めていた。

「……………だから、研修期間ってやつ？ それだったから……………」

秋彦はおもむろに掴んだ紙の容器をくるくると回し始める。

こうして眺めている間にも、秋彦は口角をあげたり下げたり、にやけたりしかめたり、とにかく忙しない。

一度ピタリと動きを止めると、さも驚いたような様子を見せた。

「あ、コーヒー冷めてるし。隆文、今日のは奢りな？買ってくるわ。」

言づのが早いか立ち上がり、秋彦はそわそわと階段を上がって行った。

その足音を聞きながら、隆文はガクリと肩を落とした。

「俺なにやってんだか……………」

## 四話

手に握るはおにぎり。

梅、鮭、昆布、ツナマヨ、カルビ、新発売のキムチチャーハン。

なんとなくで朝飯を食べそびれたまま、朝10時からの店に入り、そろそろお昼も過ぎてきた。

ここで急に、前に並べられていく食料 並べているのは紛れもない秋彦本人である が、こちらの気をそいでくる。

自動ドアが開く電子音にあわせて、そのおにぎりの列を睨みながら、声を絞り出した。

「いらっしやいやせつ。」

「外山君、いいね。だんだん板についてきたんじゃない？」

隣で同じく商品を陳列していた笹部は、顔をすっかり秋彦に向けて話しかけた。

色白の中年の男性は、秋彦が思っていたよりも、ずっとフレンドリーな態度で接してくる。

「でも今のお客さんは帰られる人。忙しくても、できるだけ入り口を確認してね。」

「はい。」

分かっているんだかどうなんだか、返事だけはやたらしっかりしていた。

とろんとした瞳で弁当に手を伸ばしている秋彦を、笹部がしばらく観察していたが、頭の中が食欲でいっぱいであまり気にしている余裕はなかった。

結局、長い髪は後ろで1つにまとめられていた。

軽く出勤前に、手ぐしで集めてまとめただけである。

前髪まですべて入れてしまったので、すっきりしているにはしている。

店のビビットカラーの制服が似合わない。

再び自動ドアの電子音が鳴った。

さっき忠告されたばかりの秋彦が、くるりと上体だけで後方へ振り返った。

色白で、口角が上がり気味の、またもや長い髪はゆるくまとめられていて……彼女だった。

そして、こちらのほうを見るなり、表情がほころぶように笑顔になる。

笑うとやっぱり目が細くなった。

走ってきたのか、冷たい風を受けたのか、頬が少し紅潮している。

「ああ、おはよ。」

笹部の声に、秋彦は一気に現実に引き戻されたような気分になった。でも、夢の中の少女は消えない。

彼女を少女と呼べるかは別にして。

「こんにちは。お疲れ様です。」

心地のよい声が響く。

彼女は、二人の前に来ると足を止めた。

「はじめてかな？」

笹部が二人の顔を見比べた。

現在秋彦にとつての天使となりつつある彼女は、秋彦の顔を見て、先ほどと変わらない笑顔を向けていた。見つめられて、顔面が硬直する。

「あ、この間面接にいらしてましたよね？」

あの状況で覚えてたんだ。

秋彦は心の中ですばやくつつこみを入れた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9775p/>

---

桃崎さんに一目惚れ

2011年10月8日13時52分発行